「帰国子女教育を考える会」通信 第17号(2008年1月)

内 容

巻頭言

第54回研究例会報告

発表者/寄稿者 [生野 康一・「エコー」(西原 三芳子)・「かけはし」(片岡 晶子)・
上久保 達夫・小島 勝・坂田 直三・佐々木 豊・小路 清一・土肥 豊・山下 良一・
井嶋 悠]

お知らせ・編集後記

巻頭言

「考える力」の再認識とささやかでも行動へ—新事務局(環境)を得て—

「帰国子女教育を考える会」事務局

井嶋 悠

「帰国子女教育を考える」何を?考えるだけ?行動は?本研究会で研究例会を重ねれば重ねるほどに行われている問い掛けである。

今夏、香港で開催した第4回日韓アジア教育国際会議で「国際交流で最も大事なことは?」との日本語による問いに、しばらく考えた後「smile、微笑み、かな」とアジアスマイルで応えた台湾の女子学生。香港で生まれ国内外を移動し、“キコクシジョ”のレットルに死を考えるほどに懊悩し、17歳の今「私は私では?」と自身の言葉を紡ぎ始めた日本の女子高校生。

日露戦争6年後、日韓併合1年後の明治44年8月、夏目漱石は『現代日本の開化』と題して和歌山で講演し、「内発」と「外発」をキーワードに日本の危うさ、空虚感を語った。漱石はその講演の終わりで言っている。「…私は名案も何もない。ただできるだけ精神衰弱に罹らない程度において、内発的に変化して行くがよかろう…」と。

21世紀になって7年が過ぎた。21世紀の世界の共有課題は?その今は?日本はわずか60年で世界の超経済大国としてある。戦後は終わった?どういう風に?超経済大国は自力だけによるもの?内発する時間は?微笑みは?忙しいという漢字が示す知恵。その忙しさに充足感を、否、矜持さえ持つ一部?の日本人……。そして疲弊……。

途方もない学校社会大国?現代日本にあって、海外帰国子女教育は、外国人子女教育は、更にはL.D教育は、30年来の数量観に偏った「ゆとり」教育論議、また学力観に、確かな一石を投ずるはずだ、と「表現」と「理解」と「言語事項」と言う文化領域、国語(科)教育に在る一人として、今一層思う。と言う私自身は今もって私を探しているのだが。

考える力の再認識。自身に引き寄せた時間、そこで生まれる想像力。本会が多様な人々の集まりゆえの拡散を克服し、複眼性豊かな思考の拡充、とささやかでも行動を願う。